機関誌 100 号の発行記念と次の 100 号への期待

岩田　　誠
日本神経心理学会第 6 代理事長

本学会の機関誌「神経心理学」が，創刊以来 100 号を迎えることになった．1985 年 5 月の，神経心理学という言葉そのものがまだ目新しかった時代における，本誌創刊の時から四半世紀を経た今，神経心理学は神経科学において最も注目され，もっとも牽引力のある研究領域に発展している．それに伴って，神経心理学の研究方法論も大きく変化してきた．本誌創刊の頃は，神経心理学の研究といえば，ほとんどが局所脳損傷による欠落症状の研究であり，機能障害の分析とその欠落症状に対応する病巣部位の対応というのが，神経心理学研究の主流であった．しかしその後，本学会では，変性性神経疾患における神経心理学的研究，すなわち，原発性進行性失語症や意味性デメンチア，あるいはアルツハイマー型デメンチアや，様々なパーキンソン症候群，あるいは前頭側頭葉変性症などを対象とした神経心理学研究が盛んになされるようになり，それまでの局所脳損傷においては見られなかった神経科学における新しい知見を続々と生み出していった．そのような中で，本学会会員の成し遂げた研究，およびその研究発表の場としての本誌の果たした役割は極めて大きい．また，非典型的発達過程を経た個体の神経心理学的分析などによる発達神経心理学研究も，本誌では早くから取り上げられ，今日の神経心理学研究の多様性の発展に大きく寄与してきた．更に，神経心理学の分野では，健常者における様々な大脳高次機能に関する賦活実験やその神経画像法を用いた解析，あるいはコンピュータ技術を応用した認知心理学的な分析方法などがごく一般的な研究方法となり，それらの研究で得られた研究結果は，動物実験による神経科学の先端的研究との直接的な比較検討を可能とするに至っている．

これらの研究分野の拡大的発展に加え，神経心理学研究の社会的意義も，大きく変化してきた．ヒトは社会的な存在であり，ヒトの脳はその社会的存在を可能にする仕組みを持っているはずである．このことから，神経心理学研究の対象は，個体内で完結するような能力のみでなく，個体間でのコミュニケーション能力に焦点を当てた領域にも拡大してきた．すなわち，従来の失語・失読・失書などの研究において行われてきたような，正誤判定を求めるようなテストだけでなく，WCST のような遂行機能の適切性を判定するようなテストや，ギャンブルテストに代表されるような，遂行能力の社会的適合性を評価するような検査方法などが開発されるようになり，社会的行動における行動選択のメカニズムに迫るような研究が盛んになされるようになってきたが，そのような中で本学会会員の研究成果は目覚しく，本誌はその発表の場を常に提供してきた点において，社会に大きく貢献してきたと言える．

この 26 年間の本誌の歩みは，そのままわが国における神経心理学研究の発展史を辿る貴重な資料となっている．四半世紀を越える本誌の発展を支えてきたパワーは，もちろん本学会会員の飽くなき探究心によるものであることは疑いもない事実であるが，それと同時に，本誌の学問的レベルを保つために営々たる努力を惜しまれなかった歴代の本誌編集委員長，ならびに真摯な査読作業を行ってこられた編集委員の方々に，深甚の謝意を捧げたいと思う．編集に携わるものの献身的な努力がなければ，良い雑誌は生まれない．そのような努力の積み重ねの上に，更なる次の 100 号が順調に発刊されていくことを祈念する次第である．